

令和5年度

# 手をつなぐ作品展

第71回 入賞作品集



公益財団法人 千葉県肢体不自由児協会

# ご あ い さ つ

「手をつなぐ作品展」作文募集には、多くの方々からご応募いただき厚く感謝申し上げます。

例年、11月10日から12月10日まで「手足の不自由な子どもを育てる運動」が全国的に繰り広げられます。

公益財団法人千葉県肢体不自由児協会でもこの運動の一環として「愛と友情の絵はがき」「チーバくんクリアファイル」等の募金活動で児童、生徒のみなさまにご協力いただいております。

また、この運動の事業のひとつとして、千葉県をはじめ、千葉県教育委員会、千葉市教育委員会、毎日新聞社千葉支局の共催で障がいのあるかたたちとの交流や障がいについての理解を深めてもらえるよう作品展を実施しています。

今年は小・中・高・特別支援学校を含め15校、68点の作文の応募がありました。例年、小学生からの応募が少なく、また、昨年にくらべてにおいて応募数が減少しました。

今回の入賞作品は、ご自分の障がいでだけでなく、身近にいる人の障がいに触れたり、ボランティア活動を通して係わった経験など、とても読みごたえがあり、こちらが気づかされることもたくさんある作品ばかりでした。

今年も、入賞した作品を作品集として掲載いたしました。

1人でも多くの方にご覧いただけることを願っております。

最後に、この作品展にご指導、ご協力くださいました関係機関の方々、ご応募いただきました学校の先生方、また、日頃から当協会の事業をご支援くださっている皆様にあらためてこころより感謝申しあげごあいさつとさせていただきます。

令和6年2月

公益財団法人 千葉県肢体不自由児協会

理事長 白 井 正 一

# 作文入賞者

## 千葉県知事賞

大久保 友葵 (千葉県立東葛飾中学校 3年)

## 題名

彼らの「選択」

## 千葉県教育委員会教育長賞

広瀬 隆翔 (千葉県立千葉商業高等学校 3年)

消えることのない絆

## 千葉市教育委員会教育長賞

山田 拓弥 (千葉県立桜が丘特別支援学校 高等部3年)

チャンスと自信

## 毎日新聞社千葉支局長賞

正野 健志朗 (千葉県立桜が丘特別支援学校 高等部2年)

僕が日々感じていること

## 千葉日報社社長賞

小林 紗恵 (松戸市立和名ヶ谷中学校 2年)

人と人との支えあい

## NHK 千葉放送局局長賞

内田 玲奈 (松戸市立和名ヶ谷中学校 2年)

守る命、守られる命

## 千葉県小学校長会会長賞

西ヶ迫 依月 (千葉県立桜が丘特別支援学校 小学部6年)

讃えられて開いた心のドア

## 千葉県中学校長会会長賞

鷺尾 巧 (浦安市立高洲中学校 3年)

「八組最幸」

## 千葉県特別支援教育研究連盟理事長賞

高橋 ほのか (千葉県立桜が丘特別支援学校 高等部1年)

出来ないことと出来ること

## 千葉県肢体不自由児協会理事長賞

星野 詩歩 (松戸市立上本郷第二小学校 2年)

手話のたいけん

藤吉 七海 (千葉県立船橋夏見特別支援学校 中学部2年)

私が思うこと

# 総評

毎日新聞社千葉支局長

伊藤 一郎

歴史ある「手をつなぐ作品展」は今回、71回目を迎えました。私自身、令和5年5月に千葉に赴任し、この度初めて審査に参加させていただきました。応募作品に大変感銘を受けました。

高校2年の車いす利用者の生徒さんは、「ユニバーサルデザイン」や「バリアフリー」の現状について疑問を呈しました。街で時折見かける「みんなのトイレ」や「だれでもトイレ」について、一般のトイレを使うことができる人が利用していることがあり、「使いたい時に使えないことが多い」と訴えました。ユニバーサルデザインという言葉には、誰にでも優しいという、どこか心地良い語感がありますが、とても重要な指摘だと思いました。障がいがある当事者の立場で物事を考えることの大切さについて、気づきを与えられました。

中学3年の生徒さんは、ボランティアで出会った児童発達支援施設の先生から聞いた言葉を記しました。「生まれる場所や家族、人生を終える日にちや場所は、自分で選ぶことが出来

ません。でも、それまでの間の時間は自分で選べるものがたくさんあります」。この言葉には、障がいの有無に関わらず、全ての人に当てはまる普遍性があります。聴覚障がいがある従兄弟が得意な絵を生かし「画家」を目指すようになった経緯も含め、生きる中で「選択」の意味を考えた筆者には、言葉の力に気づく豊かな感性があると感じました。これからも、その感性を伸ばして行ってほしいと思いました。

高校3年の車いす利用者の生徒さんは、東日本大震災の被災地の祭りに毎年参加しています。リズム感のある文章の展開や、経験した人にしかなけない描写のリアリティーは素晴らしく、果敢な行動力に感服しました。そのパワーは、障がいがあることで「今まで悔しい思いを沢山してきた」からこそ、生まれているのかもしれない。そして「どんな困難にぶつかっても、挫けずに」復興していく被災地の人たちのように、自分の人生を歩みたいという決意からエールを送りたいと思いました。

言葉には人を感動させる力があります。それを今回の審査で改めて感じました。これからも、悔しかったこと、うれしかったこと、感動したこと、を力強い言葉で表現して行ってほしい。そう願っています。



令和5年12月5日  
社会福祉センター会議室にて審査会開催



令和5年度  
「手足の不自由な子どもを育てる運動」募金頒布品  
愛と友情の絵はがき・チーバくんのクリアファイル

## 作文入選作品

### 千葉県知事賞

#### 彼らの「選択」

千葉県立東葛飾中学校

三年 大久保 友 葵

私には聴覚に障がいを持った、五つ下の従兄弟がいる。親同士の仲が良く、幼い頃からよく互いの家に泊まりに行くなどの交流を行っていたが、小学生の頃の私は、正直彼のが苦手だった。会話は常に正面で口の動きを意識して行わなければならなかったし、教科書の音読のお手本を頼まれた時は、クラスの前で発表するくらい、大きな声で読み上げる必要があり、非常に疲れる時間だった。

小学校高学年になってからは、互いの用事やコロナ禍などでなかなか会う機会も少なくなってきた。今年の春、久しぶりに彼が私の家に泊まりに来た。その時に私は一つ、とても大きな衝撃を受けた。それは、彼が学校の宿題として我が家を持ってきた、植物の観察日記の絵の正確さである。いわゆる「絵が上手い」とはまた違う、細部まで丁寧に記録されたアブラナの絵は、まるで写真のように生き生きと花を咲かせ

ていた。そして、彼の将来の夢は、いつの間にか「ドーナツ屋さん」から「画家」になっていた。帰り際、彼はこんなことを話していた。

「皆の声がよく聞こえないのなら、その代わりになるくらい、皆の瞳と話したい。」

その言葉は、彼の生きた十年間がぎっしりと詰まっている、とても大きな「選択」だった。

今年の夏、私は友達に連れられて児童発達支援施設の未就学児グループのボランティアに参加した。私はそこでも彼らの「大きな選択」に何度も出くわした。従兄弟のような、人生に関わるものだけが「選択」ではない。どんなおもちゃで遊ぶのか、この塗り絵をどんなクレヨンで色付けるのか。彼らにとってそれはとても大事な「選択」であり、そして自分の選んだ道を真っ直ぐに歩んでいた。

施設の先生が最後に仰っていた言葉が非常に印象に残っている。

「生まれる場所や家族、人生を終える日にちや場所は、自分で選ぶことが出来ません。でも、それまでの間の時間は自分で選べるのがたくさんあります。」

私の従兄弟も、遊んでいた子供たちも、今自分を持つている「ハンデ」を無くすことは難しい。けれど彼らはそれと向き合って、自分なりの「選択」を下す。私だって、その判断は何度

も行ってきた。けれど彼らはそれとは違う、何かもっと強い決意が感じられた。今しかないこの一瞬を、人生を、自分が選んだ生き方で形作っていきたい。そんな思いが彼らの「選択」に詰まっていた。

私の従兄弟はあの絵でクラスの先生に表彰されたそう。電話越しでその報告をする彼の声はいつも以上に、あのアブラナのような「生気」に満ち溢れていた。彼は次にどんな道を選ぶのだろう。瞳を輝かせながら語る姿を見るのがとても楽しみだ。たとえ迷うことがあっても人生の中の、自分にしかできない「選択」を大切にしている彼らの生き方は、私にとって大事なお手本である。



## 千葉県教育委員会教育長賞

### 消えることのない絆

千葉県立千葉商業高校

三年 広瀬 隆 翔

僕には、毎年8月7日に帰省する第二の故郷がある。陸前高田市気仙町だ。東日本大震災で甚大な被害を受けた地域の一つだ。苦難を乗り越えた街に900年以上伝わる伝統の祭りがある。『気仙町けんか七夕祭り』という。切り出した杉の丸太で山車を作り、アザフという飾りをつけぶつけ合う勇壮な祭りだ。

この祭りとの出会いは10年前に遡る。成田太鼓祭に『気仙町けんか七夕太鼓保存会』が参加していた。力強い太鼓の音。勇ましい掛け声。あつという間に引きこまれた。翌年も『気仙町けんか七夕太鼓保存会』は参加していた。会長に「かっこよかったです。」と伝えると「有難う、僕の掛け声をかっこいいと思って嬉しかったよ。」と答えてくれた。しかしその後、会長の口から衝撃の言葉が飛び出した。津波被害を受けた地域を盛土して高くするため『気仙町けんか七夕太鼓祭り』は今年で最後だとのこと。最後の祭りに行かないという選択肢はなかった。現地に向かう道中、災害の恐ろしさを肌で実感した。奇跡的に残った1本の松……。

津波を被っても生き残ったその松が僕に語り掛けた気がした。「よく来てくれたね。」と。

そして2014年8月7日、僕は初めてこの祭りに参加した。地元の方々も歓迎してくれた。台地をゆさぶる太鼓の音。勇壮で華麗な笛の音。それらの音色に導かれて山車が町内を練り歩く。あれほど大きな災害があっても、綱を引く人々が一体となり挫けず前を向いて歩いて行く。その姿に胸が熱くなった。皆、大変な時期なのに他所から来た僕にとっても親切だった。祭りに作った料理も食べさせて頂いた。地元の人しか知らない話を聞き、祭りの一員となった気分だった。

午後、祭りの醍醐味である昼の『喧嘩』が始まった。会長の「よい、始め！」の合図で勢いよく2台の山車がぶつかった。『喧嘩』が終ると雷鳴が轟き激しい雨が降ってきた。天の神様も祭りの最後を悲しんでいるのだろうか。夜になり燈籠飾りが山車に飾り付けられると気仙町一帯が幻想的な雰囲気になりました。いよいよ最後の『喧嘩』だ。会長の「泣いても笑っても最後だ。」の一言の後、夜の『喧嘩』が始まった。魂が震えるような勇ましい太鼓の音。群衆の歓声。これで祭りが終わってしまうという地元の人々の大粒の涙。その全てが僕の心に突き刺さった。涙がポロポロ出た。気仙町の人々がこの祭りをどれほど大切に900年間受け継いできたのかを考えると涙が止まらなかつ

た。そしてこの年の『喧嘩』が終わった。それは『気仙町けんか七夕祭り』の最後を意味していた。

しかし幸い祭りは終わることなくその後も毎年続いている。立ち向かう地元の人々の気持ちの綱（気綱＝絆）が祭りを途絶えさせなかった。以来、毎年祭りに参加している。僕を山車のお囃子を演奏する場所に車椅子ごと乗せてくれた。地元の若者と太鼓合戦をして僕の勝ちだったこともある。こうして気仙町に帰省しているうちに僕は『気仙町けんか七夕祭り』と強い絆で結ばれた。気仙町の風景は目まぐるしく変化する復興している。

ところで、僕には障害がある。今まで悔しい思いを沢山してきた。斧が心臓に突き刺さる様な思いを何度もしてきた。車椅子というだけで地元の小学校にも中学校にも通わせてもらえず遠くの学校に通った。高校も車椅子を理由に希望の学校に進むことはできなかった。エレベーターなどなくても『気仙町けんか七夕祭り』の山車には乗せてもらえたのに。

僕の未来は決して平坦ではなく沢山の試練と壁が立ちちはだかるだろう。でも、どんな困難にぶつかっても、挫けずに復興していく気仙町の皆と同じように、この気仙町のように、自分の人生を歩みたいと思う。

## 千葉県教育委員会教育長賞

### チャンスと自信

千葉県立桜が丘特別支援学校

高等部三年 山田拓弥

自分はノリが悪い。「挑戦」には抵抗がある。性格上、一歩踏み出すには一〇〇%近い安心安全が必要だ。だから、いつも友人と遊ぶときは決まって、環境の整ったシヨッピングモールに行き、映画を観て、昼食はいつもの選択肢から選ぶ。変わり映えしない。

そんな、良い意味で言えば慎重な性格は、日常の学校生活でも同じだ。特に中学の頃は、ほぼ毎日、決まった友人と何度もループしているような同じような話を年中喋っていた。学級委員も何かの実行委員も立候補をしたことは一度もなかった。

桜が丘に入って自分が驚いたことは、普通校に比べ、子供の人数に対して大人の人数が非常に多いことだ。最初のうちは、今まで過ごしてきた環境との違いからか、どこか居心地の悪さを感じていたが、寄宿舎にも入るようになり、生活にも慣れ始めて、先輩や先生方とのコミュニケーションが段々と増えていった。

気がつけば、以前より話す人も、会話のバリ

エーションも多くなった。生徒数は少なくても、それに負けないほど個性の強い寄宿舎の先生方との会話は中学の頃とは全く違い、毎週更新される日常会話や自分が経験したことのない話が、自分に新しい考え方や価値観を与えてくれた。

それに加えて寄宿舎では、歳の離れた先輩、後輩と関わる機会が多い。学校生活だけでは関わりの少ない小学部や中学部の児童生徒、忙しくて中々話すことができない先輩達と話す経験は寄宿舎ならではのと思う。

そして、自分は昼休憩の時間に毎日、先輩達のクラスに行つて、いろいろな話をする事で仲良くなつていった。そんな日々、何気ない会話の中で、先輩から生徒会に誘われた。最初は軽い冗談だと思った。だが、自分はこんなことに誘われたことがなかったから新鮮で、正直少し嬉しかった。でも結局、その誘いを受けなかった。

それでも、生徒の少なさゆえに一年生の頃から何かしらの実行委員をする機会があった。初めは嫌々やっていたが、経験することに嫌ではなくなつていった。回数を重ねていくごとに少しずつ自信になっていった。その経験から、二年生になり、自分から部活の副部長や修学旅行の実行委員に立候補した。

さらに、夏休み前の7月、寄宿舎の先生から

あるプレゼン大会に出てみないかと話があった。内容は、日常生活の中で、ユニバーサルデザインになって欲しいものを自分の視点から社会へ提案するというものだ。

自分は、趣味の映画鑑賞について「映画館が映画を観たいすべての人にとって、満足できる場所であつて欲しい」という願いのもと「趣味をもっと楽しめる趣味へ」と題してプレゼン制作をした。

資料作成から撮影、応募までの間、一番苦労した点は撮影だ。自分は緊張すると吃音が出てしまう。そんな自分が納得するまで、何時間も撮影に協力してくださった先生は、この撮影を含め、プレゼン制作に熱心に携わってくれた。

この活動は、自分が楽しく前向きに、そして真剣に行うことが出来たと思う。特に終わった後の達成感には自分に更なる自信をくれた。

これら二年間の経験から、今では生徒会長になった。自分は高校生活の中で少しずつ自信を得ることが出来た。その理由は、ノリが悪い自分に声をかけ、挑戦する「チャンス」をくれた先輩方や先生方だ。

そんな、自分を前向きに引っ張ってくれた人たちがくれた自信を胸にこれからも挑戦していきたい。

## 僕が日々感じていること

千葉県立桜が丘特別支援学校

高等部二年 正野 健志朗

僕は、車イスを使用して生活しています。僕が日々の生活で感じていることは、ユニバーサルデザインやバリアフリーについての疑問です。

まず、ユニバーサルデザインの身障者用トイレのことです。身障者用のトイレには、「みんなのトイレ」や「だれでもトイレ」などと表示されていることが多いので、子供づれが長時間入っていたり、一般のトイレを使える人が使用して、使いたい時に使えないことが多いです。一般のトイレは狭く、手すりもないため、僕は使うことができません。

身障者用トイレしか使うことができない僕は、とても困っています。ユニバーサルデザインの表示になっていることよって、身障者用トイレしか使うことができない人たちが困っている人は僕以外にもたくさんいると思います。公共施設や大型ショッピングセンターでもトイレのある場所には身障者用は一つ二個しかありません。身障者用トイレを「みんなのトイレ」

「だれでもトイレ」という表示にするのなら、一般のトイレと同じくらい身障者用トイレを増やすべきではないかと思えます。しかし、それが難しければ身障者用トイレと、ユニバーサルデザインのトイレを区別して作るべきではないかと思えます。

次に、バリアフリーのことについてです。車イスで外出するとき、整備されている道路がまだ少なく、段差が多いところや、道がでこぼこしていたり車道から歩道に乗り上げるときの傾斜がきつかったりする所が多いため、車イスを漕いで自力で進むことが困難です。だから、歩道に上がることができず、車道を使わなければいけないので車がすぐ横をスピードを出して走っていくので轢かれないかいつも怖い思いをしています。歩道に乗り上げる時も、ほんの数センチの段差が車イスだと乗り上げられないことが多いです。健常者の人たちが用の道路だと、車イスを使っている人や足の不自由な人のことが考えられていないのだないつも悲しくなります。今は、少しずつバリアフリーな道路が増えてきていると思えますが、僕が外出していてそれを感じるのは、本当に少ないです。段差のないバリアフリーな道路が作られれば、すべての人が安全に暮らせると思うのです。その為に、すべての都道府県で車イスを使っている人や、足の不自由な人の意見を聞き、その立

場に立つてのルール作りをしてもらいたいと思います。また、道路を作った後に車イスで走行してみると、車イスでも問題なく通ることができると一番分かるのではないのでしょうか。そして、一日でも早くすべての人が安心して暮らせるような社会になればいいなと思います。





## 人と人との支えあい

松戸市立和名ヶ谷中学校

二年 小林 紗 恵

今まで何度か、障害を持つ人々のことについての授業を受けてきましたが、「大変だろうな」とか、「かわいそうだな」と、どこか他人事のように考えてしまっていました。そして、障害を持つ人にだけ目を向け、その人を支えている人々のことは、考えようとしたことはありませんでした。ですが、障害を持つ方や、その方を支えている方々について知った日や、私は「福祉とはなんだろう。自分も貢献できるのか。」と考えるようになりました。

私が通っている学校に、市の福祉について教えてくれる人々が来た時のことです。まず最初に、白杖の体験をさせてもらいました。二人組になり、目隠しを付けて白杖を持つ方と、その人を補助する人に別れます。私は、最初に目隠しをして、目の不自由な人の体験をさせてもらいました。補助をしてくれる人が「肘の上を持ってください」と言います。私はうでをつかみ、少しずつ進みながら白杖を左右について歩いてみました。一直線に進むだけでも、誰も居

ないと分かっていても視界が暗いことの不安はとても大きく、いつもなら当たり前に進む私の足は、少しずつしか進みませんでした。でもその時、「大丈夫だよ」と友達が声をかけてくれました。たったその一言だけで、少しだけ不安が消えました。ゆっくり時間をかけてコーンの外を周り終わった時、私が思ったことは、「目が見えないって、凄く不便だな」でした。もし、これを町中でやれと言われれば、私は一歩も前に進めないと思いました。次に、補助する人の体験をしました。補助する人は、障害を持つ人の少し前に立ち、障害を持った人が安心して歩けるようにするそうです。でもそれだけではありません。言葉で障害物の存在を教えてあげたりする必要もあります。思うように進めない障害を持つ人の不安を解消してあげるのも、補助をする人の大切な役目だと感じました。

次に、車イスの体験をさせてもらいました。車イスは、乗る側も足が自由に使えず、悲しい思いをしました。私が特に思ったのは、「介護する人も同じ位苦労している。」でした。まず、障害者の方を車イスに乗せる時です。片足ずつ、車イスの「フットサポート」という所に、優しく置いてあげます。私は今まで障害者の方が自分で乗るものだと思っていたので、おどろきました。そして、うしろで車イスを押します。意外に操作が難しく、初めはとても手こずりま

した。それだけでも大きな苦労するのに、押している間も乗っている方が退屈しないように世間話をするのだそうです。私も頑張ってみましたが、話題が見つからずに苦労しました。そして、いつもこれをそつなくこなしている人々は凄いなと尊敬しました。

授業が終わり、家に帰ったあと、私は福祉について色々調べてみました。そこで分かったのは、「福祉」とは「ふだんのくらしのしあわせ」ということです。「しあわせ」のためにそれぞれの人が力や知恵をし合う、「仕合せ」という意味もあるそうです。

福祉という言葉は障害を持つ人だけに向けた言葉ではなく、その人を支えている人も含めての福祉だと私は思います。もちろん、それは私達にも当てはまります。人と人が支え合うことで、「しあわせ」は生まれるのではないのでしょうか。



## NHK千葉放送局局長賞

### 守る命、守られる命

松戸市立和名ヶ谷中学校

二年 内田 玲 奈

「私、お母さんになるんだ。」姉が言った一言で、私は気持ちがいっぱいになりました。

昨年の夏が明ける頃、姉から妊娠を告げられました。最初は嘘だと思って何回も聞いたぐらい、自分の事のように嬉しかったです。姪が出来た事、大好きな赤ちゃんが身近で産まれる事、色々な思いで心が満たされました。そして、もうつわりが始まっている事も告げられました。その時、私はまだ妊婦の辛さがどれ程なのか想像もしていませんでした。

妊娠する前からもよく家に帰ってきていた姉は、今までと変わらず私の家で夜ご飯を食べていました。つわりが段々と酷くなっている姉は、常に気持ち悪く食べてもすぐ吐いてしまい、外食が難しいと言っていました。ある日、姉がゆっくり寝ている姿を見て、私は安心したと同時に自分が出来る事を考え、支えてあげたいなと思いました。

それから約二ヶ月後、冬になった十二月頃姉はつわりが終わりました。同時期に安定期にも入り、友達に知らせる事が出来ました。食べる

ものは限られているけど、前よりも沢山食べるようになりました。それどころか、元々少食だった姉が大食い選手のように沢山食べていたので、驚いたけどすごく嬉しかったです。甘い物も苦手だったのによく食べるようになり、私は姉との食事が一つの楽しみになっていました。お腹も少しずつ出てきて体の負担が多くなると考えた私は、重い荷物を持つたり長く立たせないよう出来る事は私がしました。姉から「ありがとう。」と言われるたび自分が役に立っていると感じ、母に私がしている事を話しました。

母は、「当たり前前の事だよ。」と言いました。少しほめられると期待していた私は、恥ずかしくなり改めて妊婦の大変さを考えるため、姉の行動を思い出してみました。

生物が食べられないので、外食時はよくメニューを見ていた事。花粉症が酷い姉が薬を飲めず辛いと言っていた事。流行しているウイルスにかからないよう徹底していた事など。今思えば、自分だけじゃない命を抱えて生活する事は普通ではないし、経験した人にしか分からない大変さがある事が分かりました。

時は経ち、桜が散った頃。姉のお腹はすっかり大きくなり誰が見ても妊婦だと分かるくらいでした。ある日、姉と買い物へ行った時姉は車を優先スペースに停めました。その時、私はいつも気にしていなかった様々な人への取り組み

に気づきました。他にも、お腹が大きくても着れるマタニティの服がある事を知りました。

そんなある日、姉が少しの間入院することになりました。私は不安になったけど、一番不安なのは姉だと気づきました。コロナで面会が出来ないので、毎日のようにテレビ電話をしてその日あった事や、面白い話などで姉を少しでも笑わせる事が私の出来る事でした。

無事退院が出来て一ヶ月後、陣痛が来て沢山の病院の人達のおかげで無事元気な赤ちゃんが生まれ、母子共に退院ができました。

産まれた後の姉の顔はもうすっかり母の顔で、まだ小さい赤ちゃんに優しく微笑んでいます。姉がお母さん、不思議な感覚でした。

私は、姉の妊娠で沢山気付いた事と知れた事、思った事がありました。つわりや重いお腹、生物は食べれず薬も飲めない。私達にはどうにも出来ない事があります。でも、駐車場の優先スペース、マタニティの服など様々な人達の取り組みや商品のおかげで妊婦が助かっている事が分かりました。そして、ベビー用品店スタッフ、医者、助産師、病院食を作る人達などの職業も知れました。

この世界には色々な職業があるけど、私達が知らないだけで実は沢山の人に助けられて守られているんだろうなと思いました。

## 千葉県小学校長会会長賞

### 讃えられて開いた心のドア

千葉県立桜が丘特別支援学校

小学部六年 西ヶ迫 依月

私には夢がある。動画制作者になって動画を作りたいという夢だ。自分で動画を作りたいと思ったきっかけは、小学五年生で動画を作ったことだ。人の前で発表したことで、自分が変わった。

私は障害をもって生まれた。小さい頃は人見知りが激しく、母以外の人に抱っこされると、大号泣してしまう時もあったらしい。幼稚園生の頃に車椅子生活になって街で人からジロジロ見られることがあり、さらに人見知りになった。「はずかしい」「緊張する」という気持ちから、初めて会う人や大人と上手く話すことができなかつたが、車椅子で参加したお遊戯会や運動会など、とても楽しかったのを覚えている。お友達と話したり、遊んだりすることが嬉しく、笑顔の写真もたくさん残っている。しかし、心の中ではずっと、人見知りや引つ込み思案な性格を直したいと思っていた。

私は、自分が行く小学校を自分で決めた。入学する前に、家の近くの学校か特別支援学校

か、親からどちらにするか聞かれ、二つの学校を見学したり、学校について聞いたりした。私は自分のペースで勉強ができて、同じ障害をもった友達と出会える特別支援学校を選んだ。学校に初めて登校する日はとても緊張した。入学式では、入学する人の名前が呼ばれ、その時に私の呼吸と鼓動がどんどん速くなっていくのがわかった。あの時の緊張は今でも鮮明に覚えている。

小学五年生の桜翔祭では、『Sakuratabe』という水と油の実験動画の発表をすることになった。何ヶ月も前から計画をして、準備をした。動画を作るとは計画通りにはいかず想像より大変だった。動画を撮り終わった時には、疲れがあったものの達成感から「終わったぞー!」と思わず叫んだ。自分がやってみたいことを、友達と協力して一緒にできたことが嬉しくて、心が太鼓を叩いているようだった。動画を作り終え、発表の練習をした。私は発表の時に、緊張すると小さな声になってしまったり、早口になってしまふことがあり、繰り返し練習をした。本番の日は緊張して朝からお腹が痛かった。発表は親や先生、児童生徒などたくさんの人が来てくれた。入学式と同じくらいの人が多さに驚き、さらにお腹が痛くなった。発表が始まり動画が再生されると、観ている人が所々で笑ってくれた。笑ってくれたことが嬉しく

て、私の緊張がほぐれていくのが分かった。発表が終わった後に起こった大きな拍手が、キラキラ輝いている宝石のようだった。観に来てくれた人達からもらったメッセージには「編集が面白くて分かりやすい」「作ってみた」「次回も観てみたい」と書いてあった。その感想を見て、たくさんの人に楽しんでもらえたことが伝わってきて、自分の心のドアがやっと開いたような気持ちになった。私はこの発表を通して、『動画を見ている人に楽しんでもらいたい』という目標が達成できたことに、心が躍るような気持ちになった。初めて動画を発表して、自分で発表することに苦手意識があつたけれど、『Sakuratabe』を発表してから次も挑戦したいと思った。

私は今でも人見知りではある。しかし、『Sakuratabe』に挑戦して、たくさんの人に讃えられたことが自信になり、以前よりは人と話したり、自分の意見を伝えたりすることができるようになったと思う。私は今現在、ゲームをすることが好きだ。だから、動画制作者になってゲーム実況をしたい。障害がある人もない人も、私の動画を見て、楽しんでもらいたい。だから、今も動画を作っている。編集は楽しいが、自分の障害から、長時間やると体が疲れてしまう。だが、夢に向かって頑張りたいと思う。

## 千葉県中学校長会会長賞

### 「八組最幸」

浦安市立高洲中学校

三年 鷲尾 巧

私は、今、「八組」という特別支援学級にいます。理由は、苦手なことが多いからです。私は小学生のころ、「おおぞら学級」という特別支援学級にいました。特別支援学級には、交流という通常学級で授業を受ける時間がありません。交流学級の先生のアドバイスで、四、五、六年生の時には、多くの教科で交流に行っていました。交流を通じて、自分にとって、苦手なことと、得意なことがあることがわかりました。

中学校では、中学一年生の頃、私は、たくさんの言葉を音だけで覚えすぎて、正しい意味や使い方が分からない状態でした。そんな時は八組で、正しい使い方を学びました。そうすることで、相手のことを考えて、会話できるようになってきたと思います。

その後、交流学級の授業に、積極的に行きました。社会や道徳、保健体育、音楽、学活総合など、たくさんの授業を受けました。交流学級の先生方は、授業をわかりやすくしてくれる上に、面白いので、とても充実しています。特に、社会科では、先生の教え方が面白いです。それ

だけではありません。他の人の意見や気持ち、新しい知識がどんどん増えて、毎日、自分のなかに新しい発想が生まれています。自分が思いつかないような意見やアイデア、発想、考え方等に触れることができ、とても興味をそそられる話ばかりです。

さらに、楽しい行事もありました。二年生の交流では、一泊二日の林間学校に行きました。バスレクやオリエンテーリングでみんなと力を合わせて活動しました。話したことのない友達とも、いろいろな話をするのができ、友達の数が増えました。

その後、合唱コンクールがありました。八組で「あとひとつ」を歌いました。私たち八組は人数が少ないので、先輩方に、ボランティアとして参加してもらい、一緒に歌いました。とても良い合唱コンクールでした。

また、学区の小学校の特別支援学級との交流もたくさん行っています。十二月に「すまいる学級」と「おおぞら学級」とクイズ大会をしました。小学生たちが作ったかわい問題が良かったです。その後、小学生からプレゼントをもらいました。

三学期には、三年生を送る会の練習が始まりました。私たち八組は、コントの練習をしました。また、学年全員で、ハンドダンスをしました。覚えるのに苦労しました。交流学級の友達が、ダンスを教えてくださいました、助かりました。八組では、宿泊研修も行いました。トランプ

ランドに行ったときには、同じ学区の小学生と楽しくトランプをして遊びました。その後は、明海中学校の丁組との交流をしました。カードゲームで遊び、とても楽しかったです。宿泊先では、お風呂に入った後、みんなで人狼ゲームをやりました。とても面白かったです。先輩との最後の思い出です。最後に楽しい思い出をつくれて、とても良かったです。

その後、卒業式がありました。中学生になってはじめての卒業式に出席しました。先輩方の堂々とした最後の姿が見られて感動しました。

コロナの影響で、つぶれた行事がたくさんあります。三年生になった今、その分、存分に楽しんでいるところです。一秒一秒を大切にしていきたいと思います。

私は、八組で学んで、とても良かったと思います。私にとって、生活に必要な事を学びました。特別支援学級は、一人一人のことを大切にしてくれる素晴らしい学級です。校長先生はよく、「最高に幸せな高洲中学校」という意味で、「高洲最幸」とおっしゃいます。私の心に刻まれている言葉です。八組も「最幸」な学級だと、私はたくさんの人に伝えたいです。

私が、大人数の学校に通うのは、今年で最後です。来年は、特別支援学校に行くからです。残り少ない学校生活も充実させていきたいと思っています。「最幸」の高洲中学校で、そして、「最幸」の八組で。

## 出来ないことと出来ること

千葉県立桜が丘特別支援学校

高等部一年 高橋 ほのか

私は足が不自由だ。そのため、車椅子に乗って生活をしている。そんな私はよく心の中で、迷惑をかけたくないと感じる場面がある。

ある日友達に誘われて、夏祭りに行くことになった。最初は久しぶりに遊ぶということもあって、とてもわくわくしていたが、バリアフリーでもないだろう人混みの場所に行くことを考えると、不安になってきた。そして私は今まで、家族以外の人だけで出かけることはめったになかった為、みんなに迷惑をかけたくないとこの日も感じた。

当日、友達家族と会場へ向かっている途中、問題が発生してしまった。障がい者用駐車場がない。障がい者用駐車場とは、車椅子や杖を使用している方などが自動車のドアを大きく開けて乗り降りできるようにつくられた駐車場であり、会場や入口の近くに設置されていることが多いが、それが無いのだ。あることが当たり前とは思っていなかったが、少し驚いた。仕方なく会場と離れた駐車場で降りた。全くバリアフ

リーでないため、砂利道を押ししてもらったり、段差をあげてもらったりしながら会場に到着した。やっぱりだ。私が行くことで、大変なことが多く迷惑ばかりかけてしまうと感じた。他の友達も合流すると、屋台を回った。大人がいない中大丈夫か考えていた所だった。

ドキっとした。車椅子が動く。漕いでいないのになぜだろうと思ったが、すぐに分かった。友達を押してくれていたのだ。押してくれた経験はあったはずなのに、びっくりした。その後も押し続けてくれて、色々な物を見たり買った。段差があつた所も一度は断念しようとしたが、みんなが協力してあげてくれた。そのため、私だけかもしれないが、みんなと同じように楽しめていることに喜びを感じた機会だった。

私の性格上、やってもらうのは大変だろうとか嫌な思いをさせてしまうだろうと、ネガティブに考えてしまう。どこかで、障がい者の私が友達のように過ごしていいのかと思っていたのかもしれない。そして、自分を出すことを避けてしまっていた。けれど、それは私自身の決めつけにすぎず、何も伝えていない。気づいてくれる人がいるのだから、自分から積極的に関わって人に頼ることが私のことを知ってもらうためにも必要だと感じた。

また私は、もう一つ気がついたことがある。

それは、私自身が障がい者<sup>イコール</sup>迷惑をかけるという偏見をもつてしまっていたことだ。もちろん、時には迷惑と感じる場面もあるかもしれない。しかし、障がいをもっていない人でも時には人に、迷惑をかけることだってある。だから、迷惑をかけた時や手伝ってもらった時は自分、自分が出ることは自分でやる。周りの人が困っていたら心配りをするのを大切にすれば良いと思う。私は迷惑をかける数が多い分、さらに大切にしたい。偏見をもつことを辞め、私自身について自分が知ったり受け入れたりする正直な心をもつことで、障がいと上手く付き合って自分らしく生きていけると思う。そして、失敗を恐れず様々なことに挑戦できる人、堂々と人に頼れる正直な人になりたい。



## 千葉県肢体不自由児協会理事長賞

### 手話のたいけん

松戸市立上本郷第二小学校

二年 星野詩歩

わたしは、NPO法人子どもつとまつどがか  
いさいしている「まるつといっしょにたいけん  
たい」にさんかしました。

だいい一回目は、「手話をたいけんしよう」で  
した。耳が聞こえない人や目が見えない人、の  
うせいマヒの人、きんジストロフィーの人など  
いろんなしょうがいのある人に会いました。

自分もそうならどうなるんだろう？ ど  
んなたいへんなことがあるんだろう？

その日は、手話を教えてもらいました。自分  
の名前やおはようやこんばんはなどの手話を学  
びました。

つぎにみんなでゲームけいしきであそびまし  
た。そのゲームは、自分のことを紙に書いて首  
から下げて自こしょうかいをします。紙には、  
自分の名前、何年生、すきな食べ物、すきな  
どうぶつなどいろいろ書きます。そして書いた  
ことを言ばでしょうかいます。わたしは、こ  
のようにしょうかいました。

「わたしは、星野詩歩です。二年生です。す

きなものは、ねこです。よろしくおねがいし  
ます。」

自こしょうかいは、楽しかったけどちよつと  
どきどきしました。

まるつといっしょにたいけんたいに行つて自  
分のしらないしょうがいをしりました。そこで  
会つたしょうがいのある人は、ふつうにくらし  
てるように見えました。なぜかと言うと、手つ  
だいがなしで自分で行どうできるからです。

わたしは、手話をしてもつとおほえたいと思  
いましたが、手話はいっばいあるのですぐにお  
ぼえられなさそうです。

わたしは、手話をぜんぶおほえてテレビの  
ニュースなどで見る耳がきこえない人のため  
に手話でつたえる人になってみたいです。しょ  
うがいのない社会になつてほしいです。だけ  
ど、それはできないからたとえば学校に手話の  
先生が来て、みんなが手話をおほえたら、耳が  
きこえない人と楽しく話ができると思います。  
わたしは、そのような社会にしたいです。



## 千葉県肢体不自由児協会理事長賞

### 私が思うこと

千葉県立船橋夏見特別支援学校

中学部二年 藤吉 七海

私は、車いすで生活をしています。私が生活する中で困っていること、悲しいことなどがあります。その中の三つを紹介します。

一つ目は、階段でしか行けない場所があることです。なぜなら、家族で出かけようと思っても、エレベーターがなければ行けないということがあるからです。たとえば、エレベーターがあったとしても、出かけた先で、途中から階段しかない場所は、車いすでは行けなくなってしまうので少し悲しくなります。どんな場所にもエレベーターがあれば、もっと家族で出かける場所が増えるのに、と思います。

二つ目は、道が狭いところは通りづらいということです。なぜなら、車いすで生活をしている私にとっては、車いすが幅をとってしまい、安全に通ることができないことがあるからです。また、自分が通ることができても車いすの幅が、他の人が通る道をふさいでしまうこともあります。そのとき、私は、申し訳ないなと思います。車いすでも通りやすい広い道が増えたい

らしいのに、と思います。

三つ目は、高いところにある物を取ったり、置いたりできないことがあることです。例えば、高いところにあるものを取るうとしても、車いすに乗っていると、手を伸ばしても届かないことが多くて大変です。買い物でお会計をする際に、商品を台の上に乗せたり、店員さんに渡したりする必要がありますが、会計の台が高いと届かないことがあります。店員さんが気を遣ってくれることも、申し訳ないと、思っています。

車いすに乗っていると、車いすに乗っていない人と比べてみるとできないこともあり、自分のできる事が限られていると感じることがあります。前述した三つのことのように悲しいと感じたり、困ったりすることもあります。しかし、車いすで生活しているからこそ、経験することができるともあります。車いすに乗っていない人からすると、車いすで生活している人の気持ちがわからなかったり、車いすで生活している人は、車いすで生活していない人の気持ちがわかっていなかったりするかもしれないと思います。

これからは、もっと便利な世の中になり、車いすで生活している人も生活していない人もお互いの気持ちがわかり合えるようになってほしいと思っています。





---

令和5年度

手をつなぐ作品展

**第71回 入賞作品集**

---

発行 令和6年2月

編集 公益財団法人 千葉県肢体不自由児協会  
〒260-0026 千葉市中央区千葉港4-5  
千葉県社会福祉センター内  
TEL 043(245)1732  
FAX 043(245)1742

---

印刷・製本 三陽メディア株式会社